２０１６．６．１７

大草

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のサマリー

１．資本主義の精神とは

　　・利益を得ること、所有することは善である。

　　・近代的資本主義とは合理的な産業経営的な資本主義をさす。

　　・世俗内的禁欲の思想あるいは天職義務という思想は、プロテスタントの宗教意識に由来する。

２．プロテスタンティズムの倫理

　　・利益を得ることはよくない。（カトリックでも同じ）

　　・世俗内的禁欲（勤労、節約、誠実、目標達成のための禁欲など）が奨励され、それらが社会的なエートス（習慣・慣習・心情）となった。　　　　　　　　　　　　⇒天職（絶対的な自己目的として取組む労働）という仕事の位置づけがなされた。

　　・長い間の宗教的教育の結果、天職に励むという心情が生じた。

　　・天職とは神の召命=神から与えられた使命。（資本主義を支える労働力の供給）

３．結論

・世俗内的禁欲のエートスは、金儲けを承認し、倫理的義務へと変化した。

・伝統主義の精神から資本主義の精神へエートスの転換が行われた。

・結果として宗教を意識しないで、資本主義の精神が歩き始める。

４．疑問

　　・利益を得ることがよくないとされる中で、どうやって資本主義にプロテスタンティズムの倫理が貢献したのか？

　　　⇒資本主義の社会機構が、人間に世俗内的禁欲を外側から強制するようになり、信仰など不要となり、金儲けを倫理的義務として是認するようになった。（即ち、儲けないと経営破綻することを回避した）こうして、資本主義の発展を促進するという役割を果たして終焉した？

　　・倫理とコンプライアンスとの関係は？

以上